

《神の国》の要塞と世俗国家の《ガレツリア》

野田茂徳

序

「至高なる聖三位一体の聖名によりて」⁽¹⁾と言う「冠言」で始まる二つの議定書と四つの附属文書によつてまとめられた、いわゆる「ラテラーノ条約」⁽²⁾にイタリア王国全権使節ベニート・ムッソリーニ (Benito Mussolini 1883-1945) とローマ教皇全権使節ピエートロ・ガスパッリ (Pietro Gasparri 1852-1934) はそれぞれ《In Nome della santissima Trinità》と称えながら署名を交わした。ふたりはそれぞれ己の流儀に従つて「ラテラーノ条約」正文にガスパッリは当然の如く聖職位階である枢機卿 (《Cardinale》) を自己証明として氏名の間に挿入して [Pietro Cardinal Gasparri] と署名した。ムッソリーニは一切の称号、位階も肩書の何れも氏名の前後にも間にも挿入したり加えたりしなかった。ただ [Benito Mussolini] と署名した。⁽³⁾

ムッソリーニは自らのことをドゥーチェ (Duce) と呼ばせていたことでも知られているが、まさしくファシズム (Fascismo) 運動の最高指導者であり文字どおりの「統帥」であった。ムッソリーニは、一九二二年一〇月三〇日、第一次組閣以来イタリア王国首相 (Capo del Governo) の地位を占めていた。一方、ガスパッリはローマ教皇ピウス十一世 (Pius XI 1857-1939, 位 1922-1939) の下で枢機卿にして國務長官 (Segretario di Stato) の要職にあつた。いずれも、ファシスト政権下のイタリア王国と教皇ピウス十一世下のヴァティカン (《Vaticano

《》を代表するにふさわしい人物であった。時に一九二九年二月一日のことである。

調印式の会場になったのは、ローマ市内のラテラーノ宮殿 (Palazzo Laterano) であった。ラテラーノ宮殿は、古代ローマ帝国で史上最初にいわゆる「ミラノの勅令」でもってキリスト教を公認した等の伝承⁽⁵⁾で知られるコンスタンティヌス一世の建立になる縁起に纏わるキリスト教の会堂、サン・ジョバンニ・イン・ラテラーノ (San Giovanni in Laterano) 大聖堂に隣接する宮殿である。因みに一三〇九年、教皇クレメンス五世 (Clemens V 1264-1314. 位 1305-14) がフランスによってアヴィニョンに《La Santa Sede》の移転を強いられ、いわゆる「アヴィニョン幽囚」と言われた、アヴィニョン教皇庁時代になるまで、ラテラーノ大聖堂とその附属施設、および宮殿は教皇の住居であり、《La Santa Sede》の所在地であった。

《La Santa Sede》がふたたびアヴィニョンからローマに戻ったのは一三七七年一月一七日だった。その時の教皇はグレゴリウス十一世 (Gregorius XI 1331-78. 位 1370-78) であったが、ローマでの《La Santa Sede》はラテラーノではなくヴァティカンに改まっていた。しかし、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂は今日でもヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂と同じく《教皇大聖堂》に変わりはなない。

I

教皇庁は時代とともに、時間に耐えられない問題を抱えつつ時代とともに表象は異なっている、世俗化の荒波は繰り返し押し寄せ、教皇庁には平安の時間は少なかった。多様な外部からの攻撃と内部矛盾・内部闘争をいつも孕んでいた。六四年のネロ皇帝によるキリスト教徒迫害の時、ヴァティカーヌスの丘 (Vaticanus Mons) にペテロが埋葬されたとの伝承を信じている者たちがその後ペテロの墓を示すアエディクラの周囲に集まり礼拝をしていた。しかして礼拝の中心地になってきたと言う今日に繋がるヴァティカン縁起に守られていても《La Santa Sede》で五、六百年間の《聖なるもの》(La Santità) と《俗なるもの》(La Mondanità) の葛藤はあたかも「ローマ問題」の五〇年に圧縮されるだけのものがあつた。

しかして、「ラテラーノ条約」にまで教会と国家のそれぞれの統治者はようやくとり着いた、と言つていいだろう。教皇庁にとつてもイ

タリアにとつても問題の所在に無関心を装うだけの時間的余裕がもはや残されていなかった。

ローマ教皇全権使節ガスパリ枢機卿とイタリア・ファシズムのドゥーチェ、ムッソリーニが二人揃つて「至高なる聖三位一体の聖名によりて」と称え、署名した「ラテラーノ条約」は、アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci 1891-1937) に言わせるならば、確かに「リソルジメント」(《Risorgimento》) が必然的にもたらしたイタリア中央部に存在した教皇領のイタリア王国への統一、つまり当該地域におけるローマ教皇主権の滅亡、すなわち教皇の世俗支配権の滅亡を、教皇の眼前で最後に告知することになった一八七〇年九月二〇日のイタリア王国の軍隊のローマ入城 (Le Truppe Italiane entrano a Roma) として一〇月二日、ローマのイタリア領への併合、翌年にはフイレンツェ⁽⁷⁾からローマに遷都したことによってすべてが象徴される一連の歴史的問題すなわち「ローマ問題」(《Quaestione romana》) の解決のためであり、教皇庁 (《La Santa Sede》) とイタリアの歴史的「和解」(《La Conciliazione》)⁽⁸⁾ のためであった。

ヴァティカンにとつては時間とともに凋落を避けられないローマ・カトリック教会全体の世俗社会における固有の地位の確保が何よりも優先していた。建前として言う失地の全面復帰は不可能だと承知していた。しかし、ヴァティカン地域と全国に散らばる宗教施設、夏の別荘その他の幾つかの施設と不動産を教皇の主権と共に国際的に独立した《国家》として認知してもらえよう願っていた。イタリアもファシズム運動そのものがあらゆる場面でその幻想が打ち砕かれていた。「ローマ進軍」《Marcia su Roma》以来、ムッソリーニは国王に組閣を委ねられてその露骨な暴力主義を至る所で剥き出しにして、国内外において日に日に支持基盤を失いつつあった。教皇庁もファシスト政府もこのように出口のない状況の中で、両者の「条約」にかかる期待は「奇跡」(《Miracolo》) を望むことで、言外に位相は異なっている。それでも世俗社会でそれぞれ勢力挽回の思いで一致していたのである。

II

さまざまな運動と党派が交差した困難なりソルジメントの目的を一応達成したのはピエモンテのサヴォイア家 (Casa Savoia) による「イタリア王国」への求心力と軍隊の統一であった。いわゆるイタリア王国の軍隊の一八七〇年九月二〇日、ローマ入城そして占領さらにローマをイタリアの首都とすることを宣言するのも時間の問題で、かくの如き矢継ぎ早の行為で、歴史の舞台はすっかり変わってしまった。そ

の日はローマ教皇がイタリアに存在していた教皇領内でのすべての主権が喪失した日でもあった。ローマ教皇ピウス九世(Pius IX 1797-1878. 位 1846-78) は事態の正確な状況把握と歴史理解に欠けていた。つまり、統一されたイタリアを認知しないことは勿論の事、ヴァティカンがローマ市民の支持を得ていないことさえも知らうとせず、情勢の変化をすべて無視することで、教皇の世俗権を失うことを受け入れようとしなかった。恰も退場しなければならぬ役者が、次の舞台に居残り、前場面の台詞を繰り返しているようにすっかり「道化役者」《Buttione》になってしまった己にピウス九世は気づいていなかった。

歴史上には、教皇が生前「道化役者」に転じることもしばしばあった。《La Santa Sede》がまだラテラーノにあった九世紀末の落日から一〇世紀にかけて八年間(1896-1904) 繰り広げられたおぞましき事件をローマの民衆は忘れていないにもかかわらず、高位聖職者たちには何ら歴史的教訓にはならなかった。教皇暗殺の首謀者だった司教が教皇になったものの、その死後、教皇座の主になった者は前任教皇を「異端者」《Eretico》として墓所から屍を掘り出させた。真正正銘の「屍」になっていた故教皇は教皇祭服を着せられ、教皇が座るべき聖座に座らされ「異端審問」にかけられた後、身体の一部を傷つけられ切り落とされ、さらに街頭を引きずり回された。そのうえ無造作にその「異端者」にされた屍の教皇はテヴェレ河に投げ込まれたのである。この事件の波紋は広がりそれぞれの教皇支持派の演じるロングランになってしまった復讐劇の如く、民衆を巻き込み演じるものと観衆の区別がつけがたいものになっていた。教皇の地獄巡りは八代にわたって続いた^[1]。

人間存在のみが繰り広げる果てしない虚空に変貌する可能性をいつも孕んでいる観念の営為、そのみが生み出す「聖なるもの」と《俗なるもの》が融合した精神の暗闇の深さ、そうしてこれもまた「聖職位階制」(《Gerarchie ecclesiastica》)と叙階(《Ordini》)に象徴される「苦しみの奥義」(《i misteri dolorosi》)の反転した古代的遺制にすぎないものは、尽き果てるどころ「権威」(《Autorità》)と「権力」(《Potere》)に収斂されるのである。そうしたものと本来的に異質の《聖なるもの》が、本質的に《俗なるもの》に帰属する「権威」と「権力」とが自己撞着し、「拉致・監禁」や「異端審問」等の悍ましき行為の数々が、教皇座およびその大聖堂内で連続して起きてきた歴史の苦渋を忘れているかの如く、人間と言うものは底知れぬほどに、《聖なるもの》も《俗なるもの》も我を忘れ「権威」と「権力」への執着を露にしまうものである。

イタリアでは《Autorità》は「権力」と意味するときには《Potere》の同義語になってしまっているのである。コトバが「権威」は「権力」において完全に自己撞着してしまう。そのことは《聖なるもの》と《俗なるもの》の領域の区別がなく人間存在が本質的に陥りやすいものである。「権威」が「権力」のために神話作用するとき、無名（《Anonimato》）であることのみが真の精神の貴族の品位を保ち得るものだと言ふことを知るべきである。往々にして《Autrità》＝《Potere》が長い時間に耐えられなくて、《Buffone》になってしまふこともよくあることであつた。

ピウス九世は、この期に及んで、リソルジメントの運動指導者はもちろん、イタリア王国軍に少しでも加担したものはすべて「破門」（《Sommunica》）に処すると決定を下し布告していた。まさしくピウス九世は「鳥無き里の蝙蝠」になっていた。人間存在はややもすれば世間知らずで凡人のなかで威張り得意になっているうちに己が見えなくなつてしまふ。とくに《聖なるもの》を演じている、タダの人たちにはそのようなことが言える。そのまわりの人びとも含めそのことに気づかぬことが多いため、古くから世界のあらゆる地域や場所であたかも《こども》に聞かせる形をとりながら婉曲的に「権威」と「権力」に執着し身の程をわきまえなくなつたものたちにその愚かな所業を諷す。本来のタダの人間であることを忘れてしまひあまりにも観念の古代的遺制を崇拜している己自身が滑稽にして哀れになっているどこにでもいるのぼせ切つた《阿Q》だったり、尻尾を垂れた《阿Q》だということを、知らなさすぎるオトナたちに覚知を求めているのが例えば「井戸の中の蛙」とか「蛙の王」とか「裸の王」等数限りない物語《storia》、逸話《aneddoto》、童話《favola》、譬話《parabola》であり、そうしたものを繰り返し話すことによって啓蒙し続けているのだと承知しなければならぬ。もちろん「権威」と「権力」を人間の品位と錯覚しているタダの人びとには《謙虚》と言うものが欠如しているゆえに、一切の比喩《metaphora》は、通俗的な物語で《こども》のための絵空事だと思つているのだ。権威主義者が夜郎自大であるとは、このようなことである。

リソルジメントの象徴であり歴史的舞台としては申し分ない「ローマ入城」の出来事に対しては、市民の大きな抵抗もない状態で、リソルジメント側のものたちは言うに及ばず、それを受け入れたローマ市民たちに教会を「破門」にするとの教皇の最後の切り札が何ら役にたたなかつた。今や精神の自由、信仰の自由と言うことを知ってしまったものたちに教皇の「恫喝」は、民衆にとっては、教皇への失望しか生まなかつた。そればかりか、ピウス九世が教皇に選ばれた時、民衆が期待した自由主義的ヨーロッパと協調するかに見せた姿勢、例え

ば近代化と変革を推進するために「国政審議会」の設置など、それらの期待が裏切られてしまっていた。かくして、ピウス九世は自ら世俗社会を直接支配できなくなり統一されたイタリアに対して、その事実を否認し「ヴァティカンの幽囚」になったのである。

III

ラテラーノ条約によってイタリア国民の中に渦巻いていた教会と国家の抗争による精神的不安は、一時的にすぎないが一応解消した。

イタリア国民がコンチリアツィオーネ（《Conciliazione》）と呼ぶ《和解》は、教会と国家の間の平和を待望していた気持ちをもそのまま表出したものであった。サン・ピエトロ大聖堂と聖天使城サンタンジェロを結ぶ大通りが、ラテラーノ条約を記念して建設されと言う時も、多数の家屋と宮殿が取り壊されても仕方のないことと市民は思った。その通りは「ヴィア・デッラ・コンチリアツィオーネ」（《Via della Conciliazione》）すなわち「和解通り」と名づけられたのであった。¹²⁾

しかし、教皇庁とイタリア政府との間には、ラテラーノ条約を妥結するまでの根気強い交渉を忘れたかのように、条約批准の後ただちに一九二九年から三二年にはコンコルダートの解釈をめぐる深刻な対立が生じた。

イタリア政府は、ファシスト体制の完成を待つて「ローマ問題」を解決することで国際的信用を確立しようとした。ファシストは一九一九年三月の「戦闘ファッシ」（《Fasci dei Combattimento》）の形成から一九二二年一〇月の「ローマ進軍」（《marcia su Roma》）の期間は、暴力的活動が政治運動の主流であった。この時の国民大衆が持ったイメージを拭い去ろうとする時期が、ファシズムが全体主義的でない、幅広い自由な体制に取り組んでいた時代である。この矛盾した現象の為、この時代の政治や文化活動における幅の広さに大衆も知識人もファシズムの本質を見失う結果になっていた。そして一九二五年から二〇年代の末までには、ファシズムや金融資本家との連合体制が出来上っていた。¹³⁾

ムッソリーニは確固としたファシズムの指導者としての地位にあった。イタリアをファシズム一色にした《警察国家》にし、ファシズムは暴力というイメージに直結させるような政治活動をムッソリーニは出来る限り排除しようとした。しかし、ファシズムは「初期のファシズム」を荷負った活動分子には非妥協的で、暴力的で、反聖職主義的である派閥をも内包していたのであった。¹⁴⁾「反教権主義」ということでは

ファシストの初期運動の中では重要なモチーフであったにもかかわらず、ファシズムが拡大するにしたがい、ファシストの内部で「反教権主義」は力を失いつつあった。しかし、教皇庁と交渉を重ねていたムッソリーニは、あえてファシズムの「反教権主義」を完全には押さえこもうとはせず、少なくとも一九二九年の条約調印までは、そのような態度を取り続けた。

幅の広いファシズムを目指していたムッソリーニは、国王、軍隊、資本家との関係を「初期ファシズム」の評価ではなく、国家的合意を形成しようと努めていた。それ故に「一九二五年から二九年にかけての歴史は、その大部分が、ムッソリーニがこうした諸機関と安定した協調関係を結ぶのに用いた措置に対するファシズム運動の抵抗を、ムッソリーニが排除する過程の歴史であった。」⁽¹⁵⁾

かくして、ファシズムはムッソリーニが独裁的権力を確立はしていたが内部は複雑であった。一方、教皇庁にとっても、イタリア国内の政治的、社会的影響から逃避することはできなかった。「ローマ問題」はまさに「ペテロの世襲領」(patrimonium Petri)のイタリアによる占領であつただけに問題は重大であり、しかもサヴォイア王家はローマを首都と定めたイタリア国王になっていた。そこに、もう一人ローマの主がいるというのは厄介であつた。イタリアにおけるカトリックの立場はこのようにして、諸外国のカトリック教会と異なっていた。ローマの司教は、単なる大司教ではなく十二使徒の主人の後継者、キリストの代理人その人であり神聖にして侵すべからざる存在なのである。⁽¹⁶⁾それ故に、イタリアに於ける教会と国家の関係は、諸外国に於ける教会と国家との関係と異なっている。歴代のイタリア政府は、どのような政治的または非政治的立場であつてもローマ教会の「教皇権」(Papato)と国際的な重要性に対して争ってきた。教会とファシズムの関係は、そういう意味で国際性がありヴァティカンとイタリアの間に横たわる「ローマ問題」は外交問題でもあつた。

ヴァティカンは確かに、イタリアに対する政治的関係の樹立だけを問題としていたのではなくピウス十一世在任時代は、教会と国家の関係を全てのカトリック国と整えるために積極的に外交を進めた。イタリアとの関係改善は、そうしたヴァティカンの外交政策の一環として把握してこそ、ヴァティカンの指導部がどのようにイタリアを考えていたかと言うことが明らかになるのである。

因みに、ピウス十一世在任時代、ヴァティカンと政教協約の調印をしたカトリック国は、ラトビア (Latvianum) 一九二二年五月三〇日⁽¹⁷⁾、バーヴァリア (Bavarianum) 一九二四年三月二九日⁽¹⁸⁾、ポーランド (Polonicum) 一九二五年二月一〇日⁽¹⁹⁾、フランス (Gallicum) 一、
II、一九二六年十二月四日⁽²⁰⁾、リトアニア (Lithuanicum) 一、一九二八年九月二七日⁽²¹⁾、チェコスロヴァキア (Cecoslovachum) 一九二八年

二月二日⁽²²⁾、ポルトガル (Lutitanum) I、一九二八年四月一五日⁽²³⁾、イタリア (Italicum) 一九二九年二月一日⁽²⁴⁾、ポルトガル (Lusitanum) II、一九二九年四月一日⁽²⁵⁾、ルーマニア (Rumanicum) I、一九二七年五月一〇日⁽²⁶⁾、プロシア (Borussicum) 一九二九年六月一四日⁽²⁷⁾、ルーマニア (Rumanicum) II、一九三三年五月三日⁽²⁸⁾、バーデン (Badense) 一九三三年一〇月三〇日⁽²⁹⁾、ドイツ (Germanicum) 一九三三年七月二〇日⁽³⁰⁾、オーストリア (Austriacum) 一九三三年六月五日⁽³¹⁾、である。

このように一九二〇年代、三〇年代のヴァティカン外交は世俗社会の主権国家に対してコンコルダートの締結を通して、教皇庁の世俗社会への影響力を強めようとするものであった。世俗社会での権力の行使に力点があつたのではなく、むしろ近代化してきているカトリック国における教皇庁の利益の保持と言うものに傾いていた。

ピウス十一世とガスパツリ枢機卿が考えたとおり、世俗社会に対する教皇庁の利益がイタリアに於いても確保出来るものか否か、一抹の不安を抱いていた。教皇庁はイタリア以外の国と締結した内容や考え方に大きく違いを持たなかつたが、問題はイタリアの政治体制にある。ファシストが政権を取っており、自由主義とはほど遠い政治思想が支配する独裁体制国家とのコンコルダートが、はたして有効に作用するものかどうか判断出来なかつた。それでも、ピウス十一世とガスパツリは、周辺諸国とのコンコルダートを固めて、ファシスト全体主義のイタリアとも締結に踏み込んだのであつた。教皇庁にとっては、いまやナチズムであろうがファシズムであろうがコンコルダートを締結することによって、教皇庁の世俗社会での利益を守ることでは、他に代わるものはないことを認識していた。ファシスト政権と教皇庁の「和解」は、ファシスト側からすると外堀を埋める歴史的接近が積み重ねられていた。

ムッソリーニは教皇庁が歓迎するような宗教政策を次から次へと実行に移した。小学校での宗教教育の導入、軍隊に定員化した司祭の配属、聖職者の給与を改善すること、十字架をイタリアの公共の建築物に戻すことなどがそれであつた。⁽³²⁾

リソルジメントの自由主義者たちが、意識的に反教会的政策をとってきたことに較べてみて教皇庁は、驚いていた。もともと、保守的なトリック教徒や教皇庁は、一八七〇年体制が崩壊することを希望していたので、ファシストの「ローマ進軍」には少なからぬ満足感を味わっていた。

リソルジメント以来のイタリアの自由主義はカトリックの内部にもイタリア人民党 (Partito Popolare Italiano 以後 P. P. I と略記)

のような形で反映されていたが、教皇庁はP.P.I.を冷やかにしか見ていなかった。ムッソリーニは、カトリックの中でP.P.I.を孤立化させようとして、宗教政策を発表したのであった。このようなムッソリーニの政策を、反自由主義の立場にあった教皇庁は理解できなかったのである。

一九二三年一月二〇日、ムッソリーニは秘かにガスパツリと会談した。会談の場所を提供したのは上院議員カルロ・サントウッチ (Carlo Santucci) であった。⁽³⁵⁾ サントウッチ邸での会談の中でムッソリーニがガスパツリに約束したことは、経営に困難をきたしているローマ銀行 (Banco di Roma) を倒産の危機から救うこと、その代償として、サントウッチを親ファシストのカトリック議員フランチェスコ・ボンコンパニニ・ルドヴィジ (Francesco Boncompagni-Ludovisi) と銀行頭取を交代させることであった。⁽³⁶⁾

ローマ銀行はヴァティカンが経営に深くかわり利害関係の大きい金融機関の一つであっただけに、ムッソリーニのローマ銀行への梃子入れは、教皇庁にとっても願ってもない有難い約束であった。このような形で、ムッソリーニは、ガスパツリとの第一回の秘密会談を終えた。

この時、ガスパツリは、P.P.I.⁽³⁷⁾がファシスト政府に協力的な態度を取るようにできるかぎり説得すると約束した。

P.P.I.のようなカトリックの政党が、ムッソリーニの政府にとっては目ざわりで仕方のない存在であった。それを、教皇庁の権威で押さえ込んでしまおうと言うのが、ムッソリーニの考えであった。しかし、ガスパツリのムッソリーニに対する約束も、P.P.I.のような党内に複雑な事情を持った政党を簡単に説得できるものではなかった。

IV

ガスパツリがムッソリーニとの第一回の秘密会談で約束したP.P.I.のファシストへの協力は、すぐにガスパツリのP.P.I.の説得工作にも拘らず効果を上げることは出来なかった。

P.P.I.はカトリックのイタリアに於ける政党であり、その運動を歴史的に見ると、自ずと説得の困難さと言うものも明らかになってくるのである。

第一次大戦へのイタリアの参加は、否応なくリソルジメント運動の中で統合と和解を留保した保守的カトリック教会につらなる国民にとつても、国家への統合を精神的にも政治的にも促進させるものであった。

教会はカトリック信徒の小作農や中産階級の人びとの国家への消極的協力を見ていたが、司教たちは遂には、イタリア政府の戦争努力を忠実に支持するように積極的に動いていた⁽³⁸⁾。このような司教の態度が、決して個人的な行動であつたわけはなく、ヴァティカンの政策であつたことは、容易に想像出来ることである。さて、このような教会の態度は信徒にも、とくに政治家に影響を与えはじめた。一九一三年に選出された国会議員のなかでカトリック議員のほとんどが一九一五年の参戦に支持の投票をした。リソルジメント以後、カトリックの政治家がイタリア王国政府の政策に積極的支持をし、二人の穏健派聖職主義者 (Clerico-Moderate) が入閣するようになった。フィリップ・メダ (Filippo Meda) チェザーレ・ナヴァ (Cesare Nava) である。教皇庁としての見解は一応、二人の行動はあくまで個人的行動であり、カトリック教会とは関係ないと声明を出したが、このようなヴァティカンの政策をムッソリーニは、教皇庁は裏ではカトリック諸国と結託しており、イタリアの敵であると批判した⁽³⁹⁾。しかし、イタリア政府に於けるカトリック側の二人の存在は重いものであり、国民はカトリック教会は戦争を支持しているものと理解したのであった⁽⁴⁰⁾。

ベネディクトゥス十五世 (Benedictus XV) の国務長官でもあつたガスパツリは、ヴェルサイユ講和会議でイタリアの立場を困らせるようなことは望んでいないこと、そして「イタリア人の間にある正義感の勝利に、『ローマ問題』の解決を探す⁽⁴¹⁾」と言う考えを明らかにした。教皇庁の外国軍の力を借りないでイタリア人の間で問題に取り組もうという姿勢が、ヴェルサイユにおける教皇庁駐仏大使セルレッティ (Caretini) とイタリア外務大臣ヴィットーリオ・エンマヌエーレ・オルランド (Vittori Emanuele Orlando) の交渉に水先案内人の役を果たした。

この会談が具体的にはほとんど成果をもたらすことはなかったが、外交交渉として教皇庁とイタリアが一つのテーブルにつくことが出来たということが「最大の成果」であつた。この交渉以後教皇権をどの範囲で認めうるのか、ニッティ (Nitti) 内閣時代を通して話合われ、ローマ問題を解決する糸口となつた。オルランドはこのように歴史的に評価している⁽⁴²⁾。

さて、P.P.I.はその名称が示すように、どこにもカトリック政党であるということを示すものはない。これはカトリックの原理である「聖霊の導き」とレールム・ノヴァルム (Rerum novarum) 即ちレオ十三世の労働に関する回勅 (一八九一年) にある社会的教えが自らのキリ

スト教民主主義 (Democristianismo) の計画の中に含まれていることをはっきりと認識すると共に、告解室が聖職権支持者の部屋というレツテルを貼られることをいやがっていたことを示している。⁽⁴⁴⁾ そう言うわけで、P. P. I. はカトリック教会の世俗社会の道具と思われることを望んでいなかったし、カトリック教会の代弁者でないことを注意深く国民にわかたせようするためにカトリックという表現もキリスト教という表現も使わないようにしたのであった。⁽⁴⁵⁾ P. P. I. の指導者のストウルツォ (Don Luigi Sturzo) ⁽⁴⁶⁾ は、キリスト教民主主義をそのように理解していた。しかし、これに対して保守派、言うなればカトリック右派は、一九一九年のボローニャの最初の党大会で教会の権威と権利がカトリック政党の最上位を占めるべきものであると主張した。⁽⁴⁷⁾

ローマ・カトリック教会が政党をどのように考えているのか、答えはこの時点では出ていなかった。根本的なところは、全てあいまいであった。P. P. I. は、「教皇庁の代弁者」である保守派と「反聖職権を主張する」リベラル派との間で、選択をせまられていた。教皇庁は、P. P. I. の存在そのものが好ましからざるものと思うようになっていたのである。この時、すでにガスパツリはストウルツォと会って、新しい政党のあるべき態度について話し合っているが、ガスパツリは、P. P. I. の政策に不満を述べている。⁽⁴⁸⁾

P. P. I. と教会の関係を反聖職権主義者たちは、ヴァティカンの邪悪な政治的反映としての関係という喧伝をしていた。教皇庁は、P. P. I. の出現は、世俗的支配権をまた一つ失うことになりつつあることに気づいていた。すなわち、カトリック信徒組合、小作農組合、自主的出版社、このような自主的運動の組織者と P. P. I. は一致していたし、⁽⁴⁹⁾ このような歴史の動きを統制する事は困難であった。

このように、イタリア国内でカトリック信徒の世俗社会における自主活動の発生は、それまで、カトリック信徒の反リソルジメント、保守回帰を頼りにしていた教皇庁にとって、大きな痛手になった。イタリア王国政府に対する民衆レヴェルでの教会の特権、財産の回復などをあてにすることは出来なくなっていた。

しかし、P. P. I. は設立からして教皇庁との関係が思わしくなかった故に、その後、ファシストが P. P. I. を孤立化させるために教皇庁と容易に手を結ぶことを許してしまったのであった。

ムッソリーニにとって、一九二〇年末から手掛けた宗教政策が、その第一歩だったことはすでに述べたとおりである。初期のファシストたちは、反教皇、反教会、反聖職権主義で一貫していた。それを一転したのである。しかし、当時のファシストの新聞には次のようにファ

シストの教会に対する立場が明確に書かれている。

「教会保障法についてたった一つの可能性がある。それは、その廃止である。その後、ローマをあきらめろ、という教皇への招待状にしっかりと続くものである」⁽⁵⁰⁾

このようなファシストの本音は、ムッソリーニの思想でもあった。彼は、一九二〇年末になって急に反聖職権主義を棄てたのではない。それまで、暴力で対決してきたことを戦術として採用しない方が効果が上るのではないかと理解をしたのであった。教会というものがイタリア国民の支配にとって重要な力をもっていると知ったからである。彼はガブリエレ・ダヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio) に宛てた手紙の中で、その時の心境について次のように記している。

「私はカトリックの教義は、世界に於いてイタリア領土の拡大の為に最も大きな力の一つとして利用出来ると信じます」⁽⁵¹⁾

『イル・ポロ・ディタリア』に発表しているファシストの見解とこのような急転回がムッソリーニの反聖職権主義者から、教会への日和見主義への変化と見られている⁽⁵²⁾。それは、同時にファシズムのその場限りの出まかせを積み重ねていくやり方の一つでもあった。翌年になると、二〇年までの政策との関連がなかった。一九二一年六月のイタリア下院でのムッソリーニの演説は、そのことを一層色濃くしていく。「ファシズムは反聖職権主義を実践しなければ、教えもしない」⁽⁵³⁾と。さらに、今後、教会に対して財政的援助を与えてもよいと思つていと続けた。それは教会が「世俗的権威に対する夢」を棄てあきらめた場合であると結んだのである⁽⁵⁴⁾。

ムッソリーニの慫慂不礼な演説の後、ファシストの指導部は教会に対して計算された丁寧さをもって応待していった。国家主義者たちは、イタリア民族統一主義者として袂を分かち始めた。そして、国家主義者はカトリック保守派と公然と関係を強めていった⁽⁵⁵⁾。ムッソリーニにとって、P.P.I.をカトリック内部でも支持しないようにしてしまうことが望ましかった。そうしてベネディクトゥス十五世の死去は、大きな転期となり、一九二二年二月、ヴァティカンの新しい指導者はピウス十一世となったのである。

ガスパツリは、ベネディクトゥス十五世の後継者は自分であると思っていたが、その夢は打ち砕かれてしまった。そうなれば、教皇庁の対外政策において同じ考えを持っている枢機卿を聖ペテロの後継者の座に就かせる必要が生じた。ガスパツリは、ミラーノ大司教アキル・アンブロジー・ダミアノ・ラツティ⁽⁵⁶⁾枢機卿を教皇にするために大きな働きをなした。ラツティとガスパツリにとって、教皇がヴァティカ

ンに幽閉されているような、「ローマ問題」の未解決の状態を一刻も早く解決したいという願望は一緒であった。ラッティは個性の強い頑固で独裁的な人物であったが、教皇選挙でガスパツリの推挙によって決したことが彼の個性よりもまさって重要な心的重圧になっていた。それ故に、ガスパツリの新教皇に対する政治的影響力は増大していった。

サン・ピエトロ広場の群衆に向つて、新教皇は「就任の辞」の中で、「ローマ問題」を解決し、そして「イタリアとの〈和解〉」こそが大きな課題であると述べた。

ピウス十一世は「自由主義」、「民主主義」、「社会主義」というものが時として宗教にとつて有害であるように思っていた。かつて、ラッティはポーランドへ教皇庁大使として赴任した折（一九一七年―二〇年）、ロシア革命の波がワルシャワに押し寄せてきていることを知った。社会主義の反宗教的階級闘争をこの時、ラッティは眼前にしたのであった。⁽⁵⁷⁾ラッティは、ロシア革命の影響下にあったヨーロッパの階級闘争を、ミラーノ大司教として又は教皇庁大使としての眼から、やがてはカトリック社会の中の決断を迫られることを考えていた。P.P.I.「を教会の活動分野から切り離して排除してしまうことも彼の重要な政策として生かされてきたのであった。ミラーノの貴族社会や穩健的聖職権主義や中産階級から生まれてきたものであったとしても「民主主義」という考え方に疑問を持っていた。「民主主義」はローマ教会とは馴染まないもので、P.P.I.を教皇庁の代弁者にするわけにはいかなかったのである。ピウス十一世は、高位聖職者が指導するカトリック運動を別働隊として構想していた。彼らはカトリックの規律に従う組織であり、ピウス十一世に絶対服従の組織を個人的にも希望していた。こういう組織が政治参加を考へることは、一八七〇年十一月のノン・エクスペディト (Non-Expediit) がすでに解禁されており、ピウス十一世が自ら決断を下す必要はなかった。必要なのはカトリック教会と信徒の P.P.I.へのエネルギーの吸収をいかに阻止するかということであった。

ガスパツリの指導の下教皇庁はカトリック行動団^{アッソシオン⁽⁵⁸⁾}と名付けた組織を作りあげた。彼らの行動計画というのは、政治的立場にかかわらず、その目的に於いて完全に調和してすべてのイタリアのカトリック信徒を再結集させる、というものである。⁽⁵⁹⁾カトリック・アクションは P.P.I.のように自主的な政治運動でもないことを、教皇庁自らがカトリック・アクションの会長であるジュゼッペ・ダツラ・トッレ (Giuseppe dalla Torre) を教皇庁の機関紙『ロッセルヴァトーレ・ローネ』(『L'Osservatore Romano』) の編集者に任命するということで位置

づけたのであった。以後『ロッセルヴァトーレ・ロマーノ』の紙面からはP. P. I.に関する記事を徐々に減らしていった。

ピウス十一世は、教皇庁人事においても、P. P. I.と関係を持たない司教の中から行なった。例えばジュゼッペ・ピッツアルド (Giuseppe Pizzardo) をローマ司教総代理に、フェルナンド・ロヴェダ (Fernando Roveda) を官房長官に任命した。両者ともにカトリック運動の活動的組織者であるということがピウス十一世の信任を得ていた。ピウス十一世はミラーノ大司教時代のミラーノ人脈を最大限に利用していた。ミラーノの銀行家でカトリック運動の支持者でもあったルイーヂ・コロンボ (Luigi Colombo) をローマに呼びよせカトリック・アクションを梃子入れさせようとした。その他ミラーノ・カトリック大学長であったアゴステイーノ・ゲメツリ (Agostino Gemelli) 神父たちをもカトリック・アクションの運動展開のためのメンバーに入れていった。また、エンリコ・ローザ (Enrico Rosa) 神父のようなイエズス会士のカトリック・アクションの活動家をも引き込んでいった。

一九二三年、ピウス十一世はカトリック・アクションを六つの主要組織に再編成した。⁽⁶¹⁾ 運動の組織は教会の組織に沿って、教会、教区、管区、全国組織という積み上げをしていく形をとった。カトリックアクションは、民主的である必要はない。ピウス十一世は、カトリック・アクションにとって最も必要なことは教皇への服従と忠誠と素直さが大切だと言う以外になかった。⁽⁶²⁾

このようなピウス十一世のカトリック運動の再編は、はたして日に日に増大してくるファシズム運動に対して教皇庁のアイデンティティを守るに十分のものであったのかどうか、歴史の試練がすぐ傍に待ち構えていた。P. P. I.をカトリックの政治運動から切り離し、孤立化させて行つたことは、ファシズムと教皇庁の利害、「自由主義」と「民主主義」そして「社会主義」に反対するということと一致している。そこには歴史認識と価値観の共通した前近代的精神の桎梏があつた。教会にもファシズムにも希望を抱く人々が少なくなっていくことも、時間を経つことによつて明らかになってくる。しかし、それにはあまりにも多くの犠牲を歴史的に人びとに強いたのであつた。

V

「カトリック・アクション」は「P. P. I.」と異なつて政党ではないというのがピウス十一世の見解であつた。カトリック・アクションは政治を超えた存在であることが、カトリック・アクションによつても度々強調されていた。このような表現は、分りにくいものであつたが、政

治によって教皇庁がファシストたちと正面对立などしない一つの政策でもあった。何か新しい政治的信条を一九二二年の時点で生み出し得なかったことを見ると一層はつきりしている。

新しいことと言えば教皇庁がP.P.I.との関係を弱めたと言うことだけだったと言えよう。P.P.I.を応援するのではなく、教皇庁はファシズム政府と接近するために、自主的カトリック運動を切り棄てることを実行していったことが新しい実践であった。ピウス十一世がミラーノから呼び寄せたルイージ・コロンボは、ピウス十一世の指示に従って再びミラーノでカトリック・アクションの任務についた。ミラーノにおけるファッシュとの政策協定にカトリック・アクションのミラーノ管区を代表して署名したのもコロンボであった。カトリック・アクションとファシズムの接近はこのようにミラーノという重要都市で図られたことに、ファシストたちは満足していた。コロンボはファシスト政府への教皇庁の従順さを誓ったカトリック・アクションの姿そのものに映ったのであった。コロンボは公表された一九二五年の手紙の中でそのように述べている。⁽⁶³⁾

ピウス十一世のP.P.I.への冷やかな態度は、ファシズムへの接近と深く関係していた。ピウス十一世が教皇になって、P.P.I.の自主性や民主主義的傾向が不満であったのではなく、すでに述べた如く、駐ポーランド大使時代、そしてミラーノ大司教時代にファシズムへの同情をいだきに深めていった。⁽⁶⁴⁾

一九二二年六月、ピウス十一世のミラーノ・グループであるカルロ・コルナッジャ・メデイチ (Carlo Cornaggia-Medici) は、P.P.I.以外のカトリック保守派を組織して短命には終ったが、勅令連合 (Unione Costituzionale) を創設した。一方、ローマのフランチェスコ・ボンコンパニニルドヴィズイ (Francesco Boncompagni-Ludovisi) はP.P.I.に見切りをつけて下院で国家主義者 (Nazionalista) のグループに加入した。八月になると、上院のP.P.I.の八名の議員は改良派社会主義との関係をもつP.P.I.の政策に反対であると、ストウツォに書簡を送った。⁽⁶⁵⁾

このようにカトリック信者のレヴェルではあってもミラーノやローマのカトリック貴族や国会議員のP.P.I.へのはつきりした態度は教皇庁との連携作用であったことは言うまでもない。それを補完するように教皇庁は二つの機関紙《L'Osservatore Romano》と《La Civiltà Cattolica》でムッソリーニの政策に好意を示し続けていた。それは、教皇庁が社会主義、共産主義を敵と認識している立場を反映している

ものであり、愛国的な国家主義のエネルギーを利用しながらカトリックの地位をイタリア政治の中心に確立しようとしていたことと結びついている。しかし、教皇庁は、ファシズムの危険を全く感じないわけではなかった。ファシズムの持つ暴力活動に対しては特別の注意を払って観察し続けてはいた。そうしたファシズムの擡頭を教皇庁は恐れていた。それが、教皇庁のファシズムへの「突然の批判への変化」として動いてきた。⁽⁶⁴⁾ そういう中で教会はあらためて、ガスパツリをして教会関係者に対して、P.P.I.は教会ともカトリック・アクションとも一切関係ないと明言した。教会は政治には関係がないのであり、カトリック・アクションは政党ではないと言うのがガスパツリの説明である。厳密には教会は世俗の政治とは無関係なのであり、どのような政治活動であれ、P.P.I.を含むいかなる動きもつつしむべきである、と司教たちに教皇庁の立場を喚起せしめたのであった。⁽⁶⁵⁾ しかし、P.P.I.はそうした教皇庁の見解に納得せず無視し続けた。

教皇庁はイタリア・ファシズム政権との間で「ローマ問題」解決の準備をしなければならない。しかしながらファシズムの危険と、その危険を知らながら左翼陣営を押さえ込む為には国家主義者の力を利用しなければならないと言うことも仕方のない方法だということをガスパツリやピウス十一世は承知していた。また内部には社会主義陣営と手を結ぶP.P.I.の指導部をカトリックの全ての活動分野から追放しなければならぬと言う、いくつものデレンマをかかえていた。ここで、一九二三年一月二〇日のガスパツリとムツソリーニの会談は、ムツソリーニ側から出されたただ一つの提案がP.P.I.をカトリックの中で孤立させてしまう「努力」をするようにと言う教皇庁への要請であったことを想起するならば、教皇庁とファシズムは、この点では利害が一致して手を取り合えるわけであった。

P.P.I.は教皇庁とファシズムという二つの巨大な勢力から攻撃をかけられた上に一九二三年になると四月と六月にカトリックの貴族的派閥である「ウニオーネ・ナツィオナーレ」(Unione Nazionale)が、かつてのコルナツジャルメディチの場合と同じように、教皇庁的立場の代弁者としてP.P.I.指導部を批判する宣言文を出した。この四月と六月の「ウニオーネ・ナツィオナーレ」⁽⁶⁶⁾の行動は大きな影響を党内に及ぼすことなく終った。それと、もう一つクレリコ・ファシスト(聖職権主義ファシスト)とストウルツォが呼んだところの、教会右翼のP.P.I.に対するゆさぶりであった。教皇庁は、この二つの反P.P.I.行動に対して同情を示したが、さしたる効果はなかった。教皇庁の指導は、P.P.I.自らが解散しなければならないように追い込むことであったが、そのためのカトリック教会右翼の作戦行動は成功しなかった。三月のトリノーのP.P.I.全国大会でも、親ファシストの行動は不発であっただけにヴァイカン当局はいらだっていた。そういう中

で、P. P. I. の右傾化をはかってきたヴァティカン作戦も不成功裡に終わった。それでも執拗な教皇庁の圧力に対し、ストウルツォはファシスト政府への条件付支持を表明したが、それでも満足できない親ファシストの右派が P. P. I. から離党すると言う状況になってしまった。こうした想像しなかった事態に対して、つまりヴァティカンは P. P. I. に対して、ファシズムの意向を受けて政府を支持させる約束が実行されなかったこととなり、ムッソリーニは、カトリックの大臣を閣外に戻すことによって教皇庁に不快感を表明した。

教皇庁は、政治的中立を保つ（建前としては、そのようにガスパッリは繰り返し機会あるごとにヴァティカンの真の中立を説いていた）ことか、積極的にムッソリーニ政権を支持すべきかの選択を迫られていた。教皇庁は「ローマ問題」解決の為には、何を為すべきか回答は決まっていた。それと、ファシストは、教会と聖職者に対して暴力を次々に加えると言う威嚇があったことも重要であった。

教皇庁の国内外に於けるもう一つの重要課題は反宗教勢力としての「共産主義」、「社会主義」の伸長を抑えるということであった。イタリアに於けるそうした反宗教的活動を、リソルジメントの運動まで馳せのぼってヴァティカンは考えていた。自由主義政府——カヴール(Cavour)⁽⁶⁾のようなイタリア統一主義者の政府をも許せないと思っているヴァティカンにとって、ファシストのローマ進軍も、ファシストを自由主義から共産主義までを防ぐ長い壁としての役目を評価していたことも事実であった。

ヴァティカンは説得作戦、その次のゆさぶり作戦、そして今度はもはやそれら効果のないやり方ではなく、P. P. I. への直接介入という手荒なやり方を取りはじめた。ムッソリーニにとってこれは重要なことでもあった。ドン・ルイージ・ストウルツォ (Don Luigi Sturzo) に対し教皇庁は、P. P. I. の幹事長を辞任するように勧告した。

国会にはアチエルボ選挙法⁽⁷⁾が提案されていたのであった。そうしたファシズムが、やがてすべての権力を掌握するために必要な選挙法を通過させるためには P. P. I. も邪魔な政党の一つであった。教皇庁のストウルツォに対する勧告は、彼自身、教会法に従う従順さと同じ気持ちで、あっさりと聞き入れた。このようにして、P. P. I. の内堀は埋められていった。ファシストが国会で多数を獲得するためのヴァティカンへの圧力はこのようにして、成功していった。民主主義勢力にしては、カトリック政党の中の反ファシスト闘争がこのようにして教皇庁の力によって、潰されて行くのを眼前にしたのであった。

アチエルボ選挙法が国会にて議論になった時には P. P. I. は混乱をきたしていた。ストウルツォを失った反ファシスト派はカヴァッツォー

ニに指導されている P. P. I 右派の根廻しによつて、ファシスト党と同一歩調をとることで、念願のムッソリーニの安定が保証されることになったのであった。一九二四年の総選挙では、暴力と威嚇というファシストの戦術のみならず、野党の分裂のおかげで、ファシストは投票総数の三分の二を獲得すると言ふことになった。

ところで、アチエルが選挙法の可決に対して教皇庁はその機関紙で歓迎の意を表した。⁽¹⁾このような P. P. I の弱体化と、分裂を喜んでばかりいられなかったのである。なぜならば、ヴァティカンとカトリック運動においても分裂宣言が出されることになるのであった。⁽²⁾司教とヴァティカンの対立もこのようにして生まれてきた。P. P. I 分裂はカトリック・アクションの分裂にもなった。一九二四年四月の総選挙ではカトリックの一人がファシストのムッソリーニ陣営候補者名簿に記載されていた。

ヴァティカンは確かにファシストの勝利を心よく思っていたが、⁽³⁾そうした論陣の一方で、ファシストと一体化したと思われるのは不都合であつた。それは同時にカトリック陣営の中にもファシストに反対している人びとがいたわけで、そういう意味でも、ファシストとの関係をあいまいにしておくことも必要であつた。カトリック系の新聞やヴァティカンの機関紙『ロッセルバトーレ・ロマーノ』は勿論、フィレンツェの『ルニタ・カトリカ』(L'Unita Cattolica)、ミラーノのカトリック・アクションの『ディタリア』(D'Italia)の各々の論説には、そうした教皇庁の思惑がすぐに反映していた。⁽⁴⁾あいまいな態度とは、決して支持しないと云ふことではなく、ファシズムを支持しているがあいまいな態度でいると言ふのが本音であつた。

ファシストは露骨に政敵に対して暴力を行使することを日常的政治活動の一環にしていた。そういうことに目をつぶつてはならないのにヴァティカンは目をつぶることがあつた。共産党や社会党へのファシズムの攻撃に対しては特にそうであつた。だからマッテオッティ事件が起きた時も、『ロッセルヴァトーレ・ロマーノ』と『ラ・チヴィルタ・カトリカ』(La Civiltà Cattolica)とも、マッテオッティ殺害を非難はしたが、ムッソリーニを共謀者として告発することに対しては同調することを拒んだ。教皇庁は、ムッソリーニの共謀の可能性を認めていつつも、なおムッソリーニを告発することに賛成しなかつた。イタリア・ファシズムが崩壊すれば、イタリアは共産主義革命がもたらされるとピウス十一世は本気で信じていたのであつた。それ故にピウス十一世にとっては二つの《悪》の中から、より《小さな悪》としてのムッソリーニのファシズム体制支持を選択したのであつた。

しかし、カトリック教会につらなる政治家全員がそうでないことはヴァティカンでも認めざるを得なかった。それ故に、もつと強い教皇庁の統制が必要とも考えていた。D.P.I.がムッソリーニのマッテオッティ事件の責任を追求していた。ムッソリーニの辞任要求に対して、『ラ・チヴィルタ・カトリカ』はすぐさま、D.P.I.のような社会主義政党政権を招くような態度に対して、適切でなく時宜を得ていないだけではなく、教会の立場では認め難いと批判している。この立場を教皇ピウス十一世自ら聴衆に向って演説したのであった。

このようにイタリア・ファシズム政権を支持したことによって教皇庁は、一九二四年の政治倫理上の責任を歴史的に負わねばならないのである。共産党や社会党の崩壊と解散への暴力的対応を推し進めたファシストに並んで教皇庁はD.P.I.崩壊にカトリック内部から手を貸したことで、カトリックの分裂をきたしたし、一九二六年一月、D.P.I.をファシズムの眼前で崩壊させた歴史的責任も大きいのである。⁽⁷⁾

しかし、ピウス十一世もガスパツリ國務長官もそのようには思っていないかった。教皇庁の指示に従順でない自主的で、やっかいなカトリック政党がイタリア議会に存在することの方が問題であつたからだ。ムッソリーニと「ローマ問題」を解決する為にやっかいであつた。しかし、いまや、ムッソリーニのD.P.I.を活動させないでくれとの要求は自然に満たされたのであり、最高の条件で交渉できると評価していた。カトリックの中の自由主義派、反ファシズム派を崩壊させることで「ローマ問題」を解決しようとしたこの戦術は、議会内に残っているクレリコファシストに重要な役目を背負わすことになった。

そういう中でも、上、下両院の中のクレリコファシストの中にもマッテオッティ事件の危機の最高潮の時、すなわち一九二四年八月には、草の根運動が起きた。⁽⁸⁾しかし、教皇庁には従順で、すぐに問題に対応したヴァティカンの説得に従って、ムッソリーニとの間の交渉の障害にはならなくてすんだ。

VI

クレリコファシスト(Clerico-Fascista)たちは、ファシストの中に取り込まれてしまつて政府の重要ポストを与えられていた。財務大臣にはチェザーレ・ナヴィ(Cesare Navi)、財務次官にはボンコンパニニルドヴィジ(Boncompagni-Ludovisi)、法務次官にはマッテイルジェンティリ(Paolo Mattei-Gentili)が就任していた。クレリコファシストの機関紙の編集主幹であつたマッテイルジェンティリを法務

次官に任命したことは、ムッソリーニにとって、カトリックの批判をかわすに十分の効果をもたらしていた。聖職権主義であろうがなんであらうが、ファシストの仲間入りしている彼らにふさわしく演じてもらわなければならない役柄を上手にムッソリーニは与えていた。イタリアとヴァティカンの宗教協約の締め付けにむけての準備のために、教会法改正委員会の委員長にもマッテイ・ジェンティリをしてヴァティカンと連絡をとらせていた。ヴァティカンにとっては、彼らをカトリック教会がファシズム体制と手をとるための重要な働き人であった。その他クレリコ・ファシストは国家の重要なポストを与え続けられた。⁽⁹⁾

しからば、クレリコ・ファシストにはいかなる働きをファシストの為に成したか。一九二五年、六年に多くのクレリコ・ファシストは司教管区レヴェルのカトリック・アクションにおいて重要な地位を占めていった。カトリックの信徒の組織が政治的に信頼できることをファシストに示すためにも必要であった。なぜならば、カトリック・アクションにはヴァティカンとファシスト政府に崩壊させられたP.P.I.の残党が入り活動していることは知られていた。しかし、ファシストは、クレリコ・ファシストたちの活動の成果を評価していて、P.P.I.の残党については心配していなかったが、P.P.I.の残党は一九二九年のコンコルダート締結後、カトリックの良心を問う教会との間に論争を引き起こすことになったのであった。

クレリコ・ファシストが、ファシズムの嵐の中で自らを肯定していた背景には、教皇庁の応援の他に大衆の無関心、それに加え反ファシズム陣営の分裂、そうした状況の中で自分を正統なカトリック運動であると錯覚していたところによるものであった。カトリック系であっても、「反ファシズム」を提唱した新聞を次から次に暴力的破壊と閉鎖に追い込むことに、当局は容赦しなかった。クレリコ・ファシスト系の新聞だけが許可されるというところに一九二〇年代後半のイタリア・カトリックの悲劇がある。それに引き替えますます発言力を強めていったのがクレリコ・ファシストたちであった。このような政治党派が「宗教政党」として教皇庁が支持すると言うすでに異常な状態に陥っていたのであるが、「ローマ問題」解決の為に教皇庁はここでもファシストを支持するという大きな歴史的誤りをしていたと言えよう。⁽¹⁰⁾ 故に、一九二九年までのクレリコ・ファシストはヴァティカンとイタリア・ファシスト政府にとって便利な存在であった。

教皇庁をイタリアの中でどのように位置づけるのか、どのようにしたら「ローマ問題」の解決になるのか、このような議論は現実を踏まえたイタリアの政治状況の中で実質的議論がなされていた。一九二九年までの過程の中でたとえば、カルロ・サントウッチは一九二五年に

教皇に対し、チェルレッティとオルランド会談で討議されたものと同じ内容のもので、ヴァティカンの超領土権を提案したが、ピウス十一世の積極的応答がないままであった。サントウツチが「ローマ問題」の解決は、具体的には困難であり、自分ではなく、後継者にまかせようと思っていた。⁽⁸¹⁾

一九二五年の初めにムッソリーニはパオロ・マッテイ・ジェンティリを委員長とした教会法改正委員会には、クレリコ・ファシストの上院議員カリッセ (Calisse) を加えた。そして、カピターニ (Capitani)、タロー (Taloma)、チステルナ (Cisterna) という三人の教皇聖座大聖堂参事会員を加えたのであった。特に後の三人を委員としたのは重要な意味があった。一九二九年の教会の財産に対するイタリア国家の権利の留保の原案はここで作成されたからである。これは法的原理⁽⁸²⁾によっているとファシスト政府であるイタリア王国側は主張しているが、ヴァティカンは、この点についての見解を留保していた。

イタリア政府のこの委員会を、教皇庁も支持していたことが、一〇人の枢機卿と一二五人の大司教、司教が支持の書簡を送っていたことで証明されている。⁽⁸³⁾ 教皇庁が、イタリア側の実質的關係法案の再検討と原案作りの委員会に教皇座大聖堂参事会員を委員として認可することとはありえなかったことである。

教皇庁としてはイタリア政府の中でムッソリーニが真の指導権を確立できるかどうかと言うところに関心があった。ムッソリーニが実権を持たないかぎり、つまりファシズム団体の中での内部闘争に勝ち得ないかぎり、教皇庁との正式の交渉にならないと思っていたが、一九二六年の春までにムッソリーニは党内で強力な地位を確立していた。教皇庁は、これから「ローマ問題」解決の正念場と思った。

一九二六年になるとヴァティカンとの交渉に対しても、改定法案の審議権に対してもムッソリーニの政治上の実権が表面に明確に出はじめている。教皇庁に対して、旧来のイタリアの自由主義者や保守派であつて「ローマ問題」解決に熱心でない政治家を内閣に留め置くわけにはいかなかった。やがては教育大臣のジェンティーレ (Giovanni Gentile) の失脚にまでなるのであるが、法案による「ローマ問題」解決の実務を急いでいるムッソリーニは、一九二五年一月、法務大臣をオヴィリョ (Oviglio) から国家主義者のロッコ (Alfredo Rocco) に交代させた。すでに、マッテイ・ジェンティリが法務次官には就任しており、これでイタリア政府の法務省の人事は、教会に対して忠誠なる首脳陣で固められ出来上がったのであった。

新法務大臣は、かつて己れの教会に対する立場について次のように述べている。

「イタリアはローマ・カトリック教会の組織化された精神的力、伝統的力すなわち今なお宇宙的威信と普遍的広がりの可能性を享受している制度の中にいて、イタリア人であることの恵まれた立場を無視出来ないし、無視してはならない」⁽⁸⁵⁾。

ロッコの場合は、単にイタリア人のカトリック教会への感謝ということではなく、リソルジメントで失われた教皇の世俗支配をも復興させようと夢みるような発言を繰り返している。すなわち、「リソルジメントのような自由で、世俗的な〈伝統〉」は廃止されなければならないのである。イタリア政府はもっと寛大に、そうして、もっと力を入れてカトリックになるべきである。教会がイタリアの社会的、政治的秩序を忠実に支えてくれているのであるから、それを推進し、擁護すべきである⁽⁸⁶⁾、と。

ロッコのような、政治思想を持った者を法務大臣にして「ローマ問題」の解決をはかるムッソリーニの準備体制は整備された。しだいに政府そして国内を意識的に固めて行くということがスケジュールとしては成功しつつあった。

しかし、一方ではファシスト党の書記長のロベルト・ファリナッチ (Roberto Farinacci) はヴァティカンとムッソリーニとの交渉は一切やるべきでないと思っていた。ヴァティカンにとつても、ファシスト党の書記長に反カトリック・反教権主義者のファリナッチがいるかぎり、ムッソリーニは重荷を背負って教皇庁と交渉に来るようなものだと思っていた。ヴァティカンはファリナッチの更迭を願っていたのであったが、ムッソリーニとファリナッチの意見の対立は遂に、一九二六年四月、ファリナッチをファシスト党書記長を免職させると言うことで決着がついた。一九一九年社会主義者からファシズム運動へ転身して来たファリナッチは国会内で極右の指導者となり、一九二四年書記長に就任していたのであった。ムッソリーニの鏡の如く、ファシズム運動の中では行動を共にしたものであった。書記長を更迭しても、体制はゆるがすわけにはいかなかった。不退転の姿勢がムッソリーニ側にはあった。ヴァティカンは大いに喜び、また一つファシストの中の反教会主義者が消えたことを確認した。ムッソリーニは、強力なライバルでもあったファリナッチを引退させることで勝利をおさめ書記局をも手に入れたのであった。ファリナッチの後任はアウグスト・トゥラティ⁽⁸⁷⁾ (Augusto Turati) であった。彼は、ムッソリーニの指示に従って教皇庁対策、国内における教会対策、宗教教育などを忠実に実行した。ムッソリーニは、教皇側がはたして交渉に応じてくれるのか、しかもそれはどのような形ですすめるのか判断に苦しんでいた。ロッコ法務大臣に対しては、教皇庁とイタリアとがどのようなもの

つたら満足のか法的解決があるのか慎重に、教皇庁の見解を打診するようにと述べている⁽⁸⁷⁾。教皇庁側は、逆にムッソリーニはどのような考え方をしているのか、ファシスト党内のムッソリーニ派の権力は強力になったのか、常に情報を集めていた。タツキルヴェントゥーリを通しての教皇庁の判断は、ムッソリーニ派の条約交渉への熱意ありであった。かくして、ファシスト政体の下で、ようやく「ローマ問題」の終結に向けての第一歩が、教皇庁側と足なみもそろい歩み出したのであった。

「ローマ問題」の解決に向って本格的交渉の代表団を選出しはじめた。教皇庁にとってもそれはファシスト政府にとっても、ふしぎなことに交渉が成立した後の各々の政治（教皇庁各聖省の人事を含め）変動の前兆だったのである。

イタリア側の代表にはバローネ (Domenico Barone) をムッソリーニは指名した。バローネは司法局で宗教関係を担当していた弁護士であった。「彼は忠実なファシストである⁽⁸⁸⁾」というのがムッソリーニの推薦の理由であった。バローネは、一九二六年まで國務院参議⁽⁸⁹⁾を務めていた。

一方、教皇側は、ピウス十一世が早くから着目していたパチェッリ (Francesco Pacelli) を任命した。パチェッリは、ドイツ・バイエルンの教皇庁大使としてミュンヘンに勤務したことがあり、第一次大戦中も、和平工作と捕虜や傷病兵の慰問に尽力した経験の持主であった。因に後にピウス十二世になるパチェッリ (Eugenio Pacelli) とは兄弟であった。

フランチェスコ・パチェッリは枢機卿会議の法律顧問であった。「ローマ問題」の法的対応については研究検討を十分に施していた。かつてムッソリーニがガスパツリとの秘密会談の第一回で約束したバンコ・デイ・ローマ（ローマ銀行）の梃子入れの約束に対し、ヴァティカン側の利益を守るために交渉した実務畑の専門家であった。「ローマ問題」の解決は、政治、経済問題を棚上げして宗教問題を論じることではなく、まさに宗教が政治や経済の枠の中で世俗化した国家社会の中で課題になっていることの相互認識をするには十分であり、フランチェスコ・パツチェッリはその最適任者であった。教会を代表するパツチェッリと国家を代表するバローネ二人の交渉は、急速な勢いで進んだ。一九二六年十一月までに「ローマ問題」を清算するための条約の立案に同意した。その上で宗教問題の交渉に入った、とパチェッリは日記に記している⁽⁹¹⁾。パチェッリは、イタリアとの交渉で問題なのは反聖職権主義者のイタリア国王とのファシズム政府の内輪の接渉がどうなっているかと言うことであり、重要問題は国王の同意の確認に掛っていた⁽⁹²⁾。バローネとパチェッリの二人は、各々の背後の最高指導者に

伺いをたてるための時間を除いて、すべて秘密主義で交渉は順調であった。一九二七年六月から翌年一月までと一九二八年四月から五月までの間は交渉は停止されていた。しかし、交渉はその都度確実に進んで行った。

交渉の内容はどのようなものであったのか次にその過程を検討する必要があるだろう。

VII

教皇庁の代表とイタリア政府の代表の交渉の第一の難関は、国際法に於けるヴァティカンの位置づけであった。どのような処遇でヴァティカンを認知するのか、という問題であった。

第一段階ではバローネは、領土の統治権には反対した。すでにイタリアには保証法 (Legge delle Garanzie) があり、一八七一年以来、ローマ教皇に義務の免除、政治的自由の特権を保証してきた法律はまだ生きていたからであった。それに対して、ヴァティカンは特別な領土の保有を具体的に提供するように提案をしていたのである⁽⁹³⁾。

パチェッリは、教皇庁にとって領土統治権が全体の解決の必須条件であると基本的態度を明らかにした。それ以来バローネは、ただ譲歩するだけだった⁽⁹⁴⁾。ムッソリーニは最終段階で、イタリア国王の名によつて統治されているローマ及びその他のヴァティカンが主張するわずかばかりの領土を譲るように、ヴィットリオ・エマヌエーレに説得した⁽⁹⁵⁾。その時期は一九二八年末以降であった。

次に問題なのは、教皇庁に返環される領土の面積についてであった。両者が同意したことはヴァティカン市として独立する地域を含みジヤニコロの丘であったが、教皇庁は、それに特にヴィラ・パンフィリ (Villa Panfilii) を附加してもらうことを望んでいた。ヴィラ・パンフィリについてはムッソリーニの抵抗にあい、教皇側は引き下げた。すでに一八七八年以来、ピウス九世とその後継者たちが行ってきた、教皇の事実上の統制権については、それを両者とくにイタリアが認めたことにより、問題は、小さな領土を与える、ヴァティカンから見れば主権の返環と言うことに絞られてきた。

ヴァティカン側は、この際、反聖職権主義者をなだめ、親善と精神的、霊的統治による支配を強めるためにも、ヴィットリオ・エマヌエーレの気持をさかなでするようなことを要求としてこれ以上出さないことにした。かくして《世俗的権力》をめぐる《教会》と《国家

》の論争によくやく終わりの時が来たように思えた。

財政協定については、やはりパチェッリとバローネの間では難題があった。なぜならば、教皇領の所有していた土地及び建物、それに附属していたすべての財産に対する教皇側の損失に対する補償金と言うことであつた。イタリア政府としては、保証法(Legge delle Guarentigie)で規定した賠償金の支払いを実行したくても、教皇庁がかたくなに拒否し続けている事実があつた。

このことに對して、両者が合意出来たことは、イタリア政府は七億五千万リラの現金と一兆リラに相当するイタリア国債に加えて、ヴァティカン市の現代都市国家としての建築造成工事の為の費用をイタリア国が支払うことで妥協すると言うものであつた。この約束をイタリア側は実行しなければならないと言うことを了解した。⁽⁹⁶⁾

この財政協定に対しては、ヴァティカンが財政危機に陥つていた、特に一九二〇年代に入つてそれはヴァティカンの経営権が及んでいたバンコ・ディ・ローマ(ローマ銀行)の危機でもわかるように不安要素の一つであつた。現金七億五千万リラの他に一兆リラの国債が支払われることはイタリア政府にとつて容易なことではなかつた。このようなヴァティカンの無理な要求は、ムッソリーニも実際には困つてゐた。この問題については、ファシストの内側においても、もちろん反ファシストの知識人たちも、イタリアの教皇庁への譲歩・妥協を批判した。

この二つの重要問題はラテラーノ条約を真のコンチリアツイオーネたらしめるためにはどうしても最初に解決しなければならない問題であつた。その為に四カ月が経つてゐた。

次は教会と国家のコンコルダートであつた。

一九二〇年代の教皇庁外交はヨーロッパ諸国とのコンコルダートの締結によつて存在を立証したことになつたが、イタリアと締結して独立国家(主権国家)になることこそが最重要課題であり、その為にこそ時間を費す必要があつた。内容はヨーロッパ諸国の条約と変わりばえないのであるが、原則ではそうであつても、イタリア固有の問題が、教皇庁との関係では国家の中に国家が存在し、首都の中に、別の国家の首都が存在する現実の中で、ムッソリーニに譲歩してもらわなければならないのであつたのである。

教皇庁によつて破門された神父たちをイタリアの公職から追放するという条項には、教会の世俗支配を嫌うイタリア政府は強く反対し

た。また、結婚に対する提議についてもイタリアの「婚姻法」と異なるので法律改正をやらねばならなくなるだけではなく、ファシストたちにもヴァティカンに規定されてしまう結婚に不自由を想像するものがおり、すでに長い間、自由であったものが逆行する「婚姻についての協約」には反対する者が多く、ムッソリーニも個人的には反対であった。

そうして、最も困難なコンコルダートの内容は、ファシスト側がヴァティカンに突きつけた要求であった。P.P.I.をつぶしたヴァティカンとファシスト党の連携政策ではないが、カトリック・アクション(Azione Cattolica)の将来問題についてであった。カトリック運動がこれ以上、ファッショ化していったら教会そのものが、「ローマ問題」以上に根こそぎ失うものが見えているだけに、ピウス十一世は、フランチェスコ・パチェッリに、ファシズムと交渉はしても、教会の原則としてこれ以上ファッショの波を教会は受けてはならないとした。これが、ファシストに対する教皇庁の自衛の原則となり、交渉の目的の一つともなっていた。そういう意味で、世俗社会に於いても、教会はファシズムに指導されるよりも、カトリック教会に指導されるべきとの理念がコンコルダートに織り込まれなければならないなかった。

ラテラーノ条約の締結前夜に、ピウス十一世がファシズムとの妥協できない政治的立場を認識したのではなかった。P.P.I.の解散にはファシスト党の策略と共に教皇庁も加わっていたことは事実であったが、ファシストのねらいは、カトリック組織のファッショへの合流を意図していることが一九二六年の夏と秋にははっきりしていた。つまり、カトリック・アクション(Azione Cattolica)は、政治闘争には加わらず、常に政治的中立であると宣言していたが、中立は国内でありえないことを身をもって知らされる事件が次々に起きた。

ファシスト党の支配下に属さないカトリックの諸組織に対する暴力的襲撃であった。自由主義者や社会主義者が襲撃されている時代には見て見ぬふりをしていた教皇庁は、やがてカトリックの諸団体が襲撃を受けるのを眼前にした。すなわち、カトリック協同組合、カトリック経済組織、カトリック出版社、カトリック青年団が主要なファシストの暴力襲撃の標的になったのであった。彼らはそのことを身をもつて知らされた。⁽⁸⁸⁾

一九二四年、ファシスト党は第一党になりその年にはマッテオッティ暗殺事件を彼らはひき起している。ファシズムの党内分派闘争をきりぬけたムッソリーニは、一九二五年には他党の大弾圧に乗り出した。すべての民主主義者と、その施設は破壊された。自由主義と民主主義の戦列の人びとはことごとく逮捕され、又は暴力に脅された。一九二六年には全ての野党は下院での活動を禁止された。このようにして

ムツソリーニ派はファシスト党及び国家における独裁体制を確立したのであった。この年は、反政府的政党、新聞の活動の禁止を法律で制定した年である。その取締りのために秘密警察制度の採用、特別裁判所の設置をも法令で定められ、施行に移った年でもあった。

このような政治的状况の中で、カトリックも、もはやファシズムと共存すると言うような安易な考え方は許されなかった。ファシズムと教皇庁が共存するのはかまわないが、イタリアでは、ファシズムの組織の中に組込まなければその存在は許さないと言うのが方針として明確に出てきた。そのことは後で述べる少年組織をめぐって教皇庁とファシスト政府との対立によってより明確になる。

イタリアに於ける政治状況の複雑さに教皇庁が、いまや中立などと言っておれない事態になってきていた。それが、カトリック諸組織へのファシストの襲撃事件だったわけである。

ファシスト党の他党派を攻撃する方法は二つあった。一つは、暴力行為による脅迫であり、もう一つは法律による合法的手段（ファシストに都合のいい法律を次々に成立させることによって生じる）によって身動き出来なくしてしまうやり方である。

ファシスト党は、一九二六年四月バリツラ法を出してきた。バリツラは一九二七年二月一六日正式に創設された。八歳から一四歳までの青少年少女はこの組織に加入しなければならなかった。ファシスト党はバリツラに法律的保証と根拠を与えることで、カトリック・アクションの青少年組織と格差をつけようと謀ったのである。バリツラの中に宗教的行事を入れることに法律的義務付をすることによって、つまり、バリツラに指導司祭を任命することにした。⁽¹⁰⁾と同時に教育省にバリツラを統治する権限を与えた。全ての青少年組織は、教育省の下で、しかも宗教活動をも教会の手で行えなくなっていた。このようなファシスト党の準備してきた法律による規制の意味を教皇庁が十分に認識するには時間がかかった。

さらに、教育省が州知事に対し、ボーイスカウトの全ての支部の解散権を与えるに至った時、さすがに教皇庁は、ファシズム政権が幼児組織から青少年組織まで単一化し、ファシズムに合流参加しないものは解散させるという乱暴なやり方に抗議の意見表明をパチェッリとバローネの交渉の場でなした。しかし、もはやファシズムの巨大な力に対し、抵抗として外交交渉の中断というヴァイカンの申出は何の効果も生まなかつた。全国的に地方レヴェルで少年組織をファシズムに再編させるために、既存の組織の解散権を与えられた法律にヴァイカンはあわてた。⁽¹¹⁾

パチエツリを「ローマ問題」解決交渉の場から引揚げると言うことは、教皇庁にとっても痛し痒しで、すぐに妥協せざるを得ないことはファシスト側も見抜いていた。そこで教皇は、ファシストの手による解散ではなく、自らの意志によってファシストと協力できないという意味で解散した方がよいと考えていた。^(四)

ファシスト党はバリツラに所属していないいかなる少年組織にも、公共施設での競技会出場を禁止した。そのことで、カトリックの全ての青少年組織は競技大会活動が実質的に禁止させられたことになった。^(五) 教皇庁が事の重大さを知り得たのは、このような「合法的手段」をファシズムが取りうることを証明してからであった。このようになってカトリックの青少年組織は解散を強いられた。

カトリック・アクションは、教区内に映画館、劇場、レクリエーションセンターを持っていて、その範囲の活動は出来たものの、解散したカトリック・スポーツ連盟(F.A.S.C.)のメンバーはバリツラの募集にいつまでも抵抗することに耐えきれない。しだいに、ファシズムのスポーツ活動に参入していく少年たちが増えていった。^(六)

イタリア・ファシズムと教皇庁の対立が明白になったのは、F.A.S.C.の解散を強いられた時であった。それまでは、自由主義者、社会主義者の崩壊を見ていたカトリック保守派も、教会より強い暴力的装置としての法律にただ呆然としたのであった。ここまで、ファシズムが妥協なくやるとは思っていなかったのである。「ローマ問題」を人質にしたようなファシストのやり方にピウス十一世も、ここで交渉中断を決意したのだが、一九二七年六月から二八年一月までの中断もさしたる効果を得ないまま再開せざるを得なかった。状況は益々厳しくなる一方で、これ以上延期しては不利な状況が打開できないと判断していた。ところが、ファシスト党は、ヴァティカンの足元を見るように、徹底した攻撃がかけられてきた。

一九二八年三月、ファシストの新聞は、バリツラに所属しない「道徳教育」と「体育教育」の禁止を発表し、その根拠として「社会法」の本文を公表してイタリア・ファシスト政府の基本原則を明示した。^(七) ファシズムはイタリアで、青少年教育・体育・道徳教育の単一組織化をこのようにして確立した。教会が一八七〇年以降も、ローマをイタリア統一主義者の政府に支配されていても、体育や道徳に関して教会独自のプログラムで自由に運動出来、活動していた組織はこのように、短期間のうちにすべての権利を失ったのであった。カトリック青年組織はピウス十一世のファシズムへの妥協としが映らない対応に失望していた。

ピウス十一世は、またしても、ここで交渉の中断を決定せざるを得なかった。これは一九二八年四月から五月にかけての中断のことであるが、この時は、ファシストは教皇庁の神学校まで閉鎖するであろうという脅威を感じていたとパチェッリは述べている⁽⁸⁶⁾。

この時も、前回の中断の時も、親ファシスト聖職権主義者のタッキヴェントウリ (Tacchi-Venturi) は仲裁者を買って出て妥協工作をした。「ローマ問題」を解決することは外交的にイタリアの地位を確立して西欧諸国に安心感を与えること、それ故にファシスト側も教皇庁に妥協することを受け入れてほしいと申し出ているが、その中でムッソリーニが受入れたものはカトリック・アクションに欠くことのできないカトリック青年組織、G. C. I.、G. F. C. I. とカトリック大学の学生連盟を承認するというものであった。それはコンコルダートの第四三条に簡単に次のようにしるさるることになった。

「イタリア国家は、イタリアのカトリック・アクションの一部を構成する組織を、それが教皇庁の命令に従うカトリックの教義の普及および実践のために完全に各政党とは別個に教会の聖職者位階制度の直接管理の下で、その活動を続ける限り正当と認める⁽⁸⁷⁾。」

教皇庁は青少年に対する精神的文化的領域は勿論のこと、そうしたものの影響下に体力づくりもなされるべきことで、スポーツのみが独立したものでもなく、人間形成の一環としてとらえていたことは言うまでもないことであった。コンコルダートに前述の如き一文を書き込み得たとヴァティカンが安心することはできなかった。このように書き込むことによって、すでに「カトリックの教義と普及および実践」と言うことは、そのように判断するのはカトリック教会にあると思うのがあたりまえである。しかし、これは、もう一方の署名者の政府がいることに大きな比重があることを後々知られることになるのであった。つまりファシスト党及び政府が、どのようにカトリック運動を判断するにかかっていたのであった。けれども、教皇庁にとっては、「ローマ問題」解決という目的の為にこれ以上の表現をかちえる力を持っていなかったのであった。ファシスト政府は、はっきりと、教会は、カトリック・アクション以外の活動をあきらめるように、教皇庁をコンコルダートにおいても説得していることがむしろ表出されているのであった。

このようにして、最後まで残っていた問題も一九二九年二月の初めまでに合意に達した。教皇庁とイタリア政府は、ガスパツリ枢機卿を教皇庁は教皇の全権使節に指名し、イタリア王国は国王の全権使節に首相ムッソリーニを指名し、かくして、ローマのラテラーノ宮殿でイタリアとヴァティカンの「ローマ問題」に対する和解のための条約と協約に「神を信じる」教皇庁使節と「神を信じない」イタリア王国の

使節は各々「聖三位一体の御名によりて」と称え、ラテラーノ条約に厳かに署名したのであった。かくして閉鎖されていた《神の国》の要塞と世俗国家の《ガレツリア》は、開かれた。

[注]

- (1) *Inter Sanctam Sedem et Italiae Regnum Conventiones Tractatus Inter S. Sedem et Italiam. Acta Apostolicae Sedis*, Vol. XXI, n. 6, 7 Iunii 1929, p.209. Romae. (以下 *Acta Apostolicae Sedis* は AAS と略記する。) ヴァティカンはいタリアとの間において特別にこの「冠言」の一節を挿入した。前後してイタリア以外のカトリック諸国家との間に交わされた《*Concordato*》にはこの「冠言」は一切見当たらない。
- (2) *Ibid.*
- (3) 「ラテラーノ条約」はイタリアと教皇庁《*La Santa Sede*》の間で交わした「正文」はイタリア語のみである。(1)に見るようにラテン語の表記が AAS にみられるが、双方で交換した文書はイタリア語正文だけである。後年コンコルダートの総合的比較研究のため一九三四年教皇庁立ブエリウス大学で「ラテラーノ条約」もラテン語訳とフランス語訳がなされた。Cf., *Concordat regnante Sanctissimo Domino Pio PP. XI, Pontificatus Universitatis Gregoriana Romae*, 1934.
- (4) Cf., AAS, Vol. XXI, *Trattato fra la Santa Sede e l'Italia*, p.221 / *Convenzione Finanziaria*, p.274.
- (5) コンスタンティヌス二世のキリスト教への改宗についてはエウゼビオス(Eusebios, *Vita Constantini*, I, 28-29, 32.)やラクタンティウス(Lactantiusu, *De Mortibus Persecutorum*, 44, 5)「ミラン勅命」についてもラクタンティウス(Lactantiusu, *De Mortibus Persecutorum*, 48)の伝承に頼っているだけで、言うなれば不確かな歴史的「事実」と言えよう。
- (6) Antonio Gramsci, *Il Risorgimento*, Torino, pp.23-7.
- (7) 一八六五年六月「イタリア王国」はトリノーからフィレンツェに遷都されている。
- (8) AAS., Vol. XXI, 7 Iunii 1929. 教皇庁は自ら「ローマ問題」が存在していたことを「ラテラーノ条約」の緒言のなかで認めている。Cf., AAS. Vol. XXI, n. 6, p.209.
- (9) 《*Conciliazione*》は教皇庁とイタリア王国の「和解」を意味するだけではなく、教皇庁がイタリア王国のファシスト政権と「妥協」し、結果としてはイタリア国内はもろろん国際的にファシスト政権を支持しているとの強い印象を与えた。教皇庁とイタリア・ファシズム政権の「和解」のために、その後の歴史展開は、教皇庁内の親ファシスト聖職者やイタリアのファシストたち以外には砂漠の中の《蜚蜚樓》が齎す呪縛に似ていた。

- (10) ステファヌス六世 (Stephanus VI 位 896-897) が招集した、いわゆる「Consultum Cadaver 屍公会議」。
- (11) フォルモスス (Formosus 位 891-896)
- (12) Cf., Storia d'Italia, Vol. 4, dall' Unità a oggi, Torino, 1976, pp.2166-2205.
- (13) Cf., Ibid., pp.2121-2162.
- (14) De Felice, Intervista sul Fascismo, Bari, 1975, pp.27-30. 「反聖職」、「反教権」、「反教会」と言うスローガンはいずれもファシストにとって、リソルジメントの自由主義者たちとは本質的に異つてファシストの中でも特にムッソリーニ派の強い《感情》であった。
- (15) Lyttelton, The Seizure of Power: Fascism in Italy, 1919-29, London, 1973, p.268.
- (16) ラテラーノ条約の協約 (Concordatum inter S. Sedem et Italiam) Art 1.においても教皇庁は繰返し主張している。
- (17) 批准は一九二二年一月三日、AAS, Vol. 14, 15 Nov. 1922, p.577. 《AAS》には各国との調印及び批准された年月日が Concordata の原文と共に掲載されている。
- (18) 批准は一九二五年一月二十四日、AAS, Vol. 17, 24. Ian.1925, p.41.
- (19) 批准は一九二五年六月二日、AAS, Vol. 17, 2 Iunii, 1925, p.275.
- (20) 批准についての記載なし。AAS, Vol. 19, 15 Ian. 1927, p.9.
- (21) 批准は一九二七年十二月一〇日、AAS, Vol. 19, 10 Dec. 1927, p.425.
- (22) 批准についての記載なし。AAS, Vol. 20, 1 Martii 1928, p.65.
- (23) 批准は一九二八年五月三日、AAS, Vol. 20, 4 Maii 1928, p.129.
- (24) 批准は一九二九年六月七日、AAS, Vol. 21, 7 Iunii 1929, p.209.
- (25) 批准は一九二九年六月十九日、AAS, Vol. 21, 8 Iul. 1929, p.337.
- (26) 批准は一九二九年七月七日、AAS, Vol. 21, 15 Iulii 1929, p.441.
- (27) 批准は一九二九年八月十三日、AAS, Vol. 21, 13 Aug. 1929, p.521.

- (28) 批准についての記載なし。AAS, Vol. 24, 1 Iulii 1932, p.208.
- (29) 批准は一九三三年三月一一日。AAS, Vol. 25, 7 Aprilis 1933, p.177.
- (30) 批准は一九三三年九月一〇日。AAS, Vol. 25, 10 Sept. 1933, p.389.
- (31) 批准は一九三四年五月一日。AAS, Vol. 26, 2 Maii 1934, p.249.
- (32) コンコルダートについての分析については Von Aretin, The papacy and the Modern World, London, 1970. pp.182-8. 参照。
- (33) Cf., Archbishop of Rhodes, The Vatican in the Age of the Dictators, 1922-1945, London, 1973, Chaps, 6, 10-12.
- (34) ムッショーニの宗教政策のために出された法令の全てのリストはメモロの次の書に掲載されている。
- A. C. Jemolo, Chiesa e Stato in Italia negli ultimi cento anni, Torino, 1963³.
- (35) G. De Rosa, I Conservatori Nazionali : Biografia di Carlo Santucci, Brescia, 1962, p.63.
- (36) Ibid.
- (37) 《Partito Popolare Italiano》イタリア人民党については以下の文献を参照。
- Coward, Il Partito Popolare Italiano, Firenze, 1957.
- Malgeri, Luigi: Sturzo nella Storia d'Italia, Roma, 1973. Malgeri, Storia del Movimento. Cattolico in Italia, Roma, 1980.
- (38) カトリック教会の戦争への態度についてはたゞでは Richard A. Webster, The Cross and the Fasces : Christian Democracy and Fascism in Italy, Stanford, 1960. に書かれたものがその例である。
- (39) F. Margiotta-Broglio, l'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alla Conciliazione, Bari, 1966, pp.75-76.
- (40) F. Meda, I Cattolici e la Guerra, Milano, 1928, p.56.
- (41) C. Falconi, The Popes in the Twentieth Century : From Pius X to John XXIII, London, p.128.
- (42) Cerretti と Orlando の交渉記録は、以下の文献に詳細に出ている。
- F. Margiotta-Broglio l'Italia e la Santa Sede della Grande Guerra alla Conciliazione, Bari., 1966, pp.43-58.

- (43) Francesco Saverio Nitti (1868-1953) ナポリ大学教授。自由党 (Partito liberale italiano) 所属の国会議員。その間農商相 (一九一一年四月) 蔵相 (一九一七年一月) 首相、内相 (一九二〇) に就任。ファシスト政権に反対して命。戦後帰国して再び下院議員 (一九四六―四八) 上院議員 (一九四八―五三) をとめた。Nord e Sud, Torino, 1900.をはじめ著書多数。Storia d'Italia dall'unita a oggi. Torino, 1976. 参照。
- (44) V. E. Orland, I Miei Rapporti di Governo con la Santa Sede, Milano, 1944², pp.67-71.
- (45) G. De Rosa, Il partito popolare Italiano, Bari, 1974. pp.8-9.
- (46) Luigi Sturzo (1871-1959) カトリック司祭、カルタジローネ大学教授、市会議員、市長 (一九〇五―一〇) 等をとめた。P.P.I 結成 (一九一九) 一九二六年ファシスト政権により P.P.I は解散させられ、国外追放になる。戦後帰国。Storia d'Italia dall'Unita a oggi, Torino, 1976. 参照。ストゥルツォの著作集は戦後出版されたものに次のようなものがある。いずれも彼を敬愛する、Istituto Luigi Sturzo や Istituto Italiano Edizioni Altas,そして Feltrinelli によって出版されたものである。
- Luigi Sturzo, Opera Tmunia, 1950, Milano.
- I Discorsi poljtici, 1951. Roma.
- M,G,Rossi (cura), Scritti palitici di Luigi Sturqo, 1982, Milano.
- (47) P. P. I の党大会記録での論争については次の文献を参照。
- Malgeri (cura), Gli Atti dei congressi del P.P.I., pp.58-60.
- (48) G. De Rosa, Il partito popolare Italiano, Bari, 1974. p.12.
- (49) J. M. Molony, The Emergence of Political Catholicism in Italy, London, 1977. pp.53-55.
- (50) Il Popolo d'Italia, 18 Nov. 1919.
- (51) 次の文献の中に引用されているミスハシオ宛の手紙。
- F. Margiotea-Broglio, L'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alla Conciliazione, Bari, 1966, p.52.
- (52) Ibid., pp.71-86.

- (53) P. Scoppola, *La Chiesa e il Fascismo : documenti e interpretazioni.*, Bari, 1971, pp.52-54.
- (54) Ibid.
- (55) R. A. Webster, *The Cross and the Fasces : Christian Democracy and Fascism in Italy*, Stanford, 1960, p.23.
- (56) Achille Ambrogio Damiano Ratti (1857-1939),
Cf., Papa (1922-1939), *Storia d'Italia Vol. 4 D'all 'untà a oggi*, Torino, 1976.
- (57) R. A. Webster, *The Cross and the Fasces: Christian Democracy and Fascism in Italy*, Stanford, 1960, pp.177-178.
- (58) C. Faleoni, *The Popes in the Twentieth Century: From PiusX to John XXIII*, London, 1967, pp.158-160.
- (59) Azione Cattolica Italiana とは、このカトリックの正統の名称である。以下「カトリック・アクション」と呼ぶことにする。
- (60) C. Falconi, *The Popes in the Twentieth Century From PiusX to John XXIII*, London, 1967, pp.158-160.
- (61) この組織は、G.C.I (男性)、G.C.F.I (女性) の二つが青年組織。U.D.C.I (婦人)、F.I.U.C (男性) の二つが成人組織。それに二つのカトリック大学生の組織 F.U.C.I である。
- Cf., L. Civardi, *Breve Compendio di Storia dell' Azione Cattolica Italiana*, Roma, 1956. p.186.
- (62) この点を Gasparri と Colombo 宛の書翰の中で述べらる。F. Margiotta-Broglio, *L'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alla Conciliazione*, Bari, 1966. p.161.
- (63) F. Margiotta-Broglio, *L'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alla Conciliazione*, Bari 1966. p.161.
- (64) ピウス十一世がミラーノ大司教時代にファシズムと接近していた事実については Falconi, *The Popes in the Twentieth Century From PiusX to John XXIII*, London, 1967, p.180. に指摘されている。
- (65) Cf., J. M. Molony, *The Emergency of Political Catholicism in Italy*, London, 1977. p.158.
M. Reineri, *Il Movimento Cattolico in Italia dall 'Unità al 1948*, Torino, 1975, p.39-40.
- (66) 教皇庁の中から暴力的破壊活動をするファシズム批判が表面化してきたことについては A. C. O'Brien, *L'Osservatore Romano and Fascism :*

The Beginning of New Era, 《Journal of Church and State》 Spring 1971. や、 B. Talluri, La Civiltà Cattolica e il Fascismo : 1922-24, 《Studi Senesi》 L XXVIII, p.300 に示されている。

(67) 手紙の本文は《Il Giornale d'Italia》 22 Ottobre, 1922. 参照。

(68) Unione Nazionale は一九二三年三月のトリノ大会で P. P. I 内部の右翼、親ファシストの作戦が不発に終わったために急いで P. P. I 右派の L. Tovini や M. Postalozza によって結成された。党内での支持者は増えず、すぐに立ち消えになった。教皇庁の政治的指導の弱さを、P.P.I 内部で見つけた事件であった。

(69) Camillo Benso Cavour (1810-1861) カヴールと「ローマ問題」については M. Tedeschi, Cavour e la Questione romana 1860-1861, Ginfrè, n.d. 参照。

(70) 投票総数の四の一と一票を獲得した政党又は連合政党は議会における議席を三分の二与えると言うのが主文である。これはファシストが少数で多数を支配しようとするムッソリーニ安定政権確立のための法案であった。

(71) L'Osservatore Romano, 1 Nov. 1923. の論説。

(72) Il Popolo d'Italia: 27 Mar. 1924. に総選挙を前にしたカトリックの分裂宣言の本文が記載されている。

(73) L'Unità Cattolica 31, 1924 の論説に見られる。

(74) La Civiltà Cattolica, 8. Aug. 1924 の論説もそうした傾向がよく出ている。

(75) Cf., Ibid.

(76) ピウス十一世は F.U.C.I のメンバーに向けて行った演説の原文は L'Osservatore Romano, 10 Sep, 1924. に掲載されている。

(77) P.P.I の崩壊過程とその苦悶については I. U. Camerini, Il Partito Popolare dall'Aventino alla discesa nella Catacombe, Roma, 1975. にくわしい。

(78) C.N.I の歴史については、F. Malgeri (cura), Storia del Movimento Cattolico in Italia, Vol. 4. Roma, 1980, pp.13-33. 参照。

(79) たとえば国内オリンピック委員会 (Comitato Olimpico Nazionale) の委員長に Francesco Mauro が就任していた。彼は同時に経済と教育に関

する国家諮問委員会の委員でもあった。また Stefano Cavazzoni は中央信用銀行 (Istituto Centrale di Credito) の総裁に就任していた。

(80) C.N.I や Clerico-Fascista の政策を教皇庁がやがては支持しなくなるが、それまでの役目については教皇庁もイタリア政府も支持していた。

(81) P. Scoppola, *La Chiesa e il Fascismo : documenti e interpretazioni*, Bari, 1971, p.111.

(82) Cf., Jemolo, *Chiesa e Stato in Italia negli ultimi cento anni*, Torino, 1963³, p.226.

(83) Cf., F. Margiotta-Broglio, *L'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alla Conciliazione*, Bari, 1966, pp.491-2.

(84) A. Lyttelton (ed.), *Italian Fascism from Pareto to Gentile*, London, 1973, p.267. に引用されている。

(85) Cf., R. Sarti (ed.), *The Axe With ; Italian Fascism in Action*, New York, 1974, p.37.

(86) Augusto Turati, *Fuori dell'ombra della mia vita, Dieci anni nel solco del fascismo*, Brescia, 1973.

(87) P. Scoppola, *La Chiesa e il Fascismo : documenti e interpretazioni.*, Bari, 1971, pp.117-118.

(88) *I Documenti Diplomatici Italiani, Settima Serie (1922-35)*, Roma, 1952-, Vol. VI p.235. No. 322. 31 Mai, 1926.

Tacchi-Venturi から A. Giannini に宛てた書簡。

(89) D. A. Binchy, *Church and State in Fascist Italy*, Oxford, 1970², p.172.

(90) Consigliere di Stato という制度は、トリーノ王のサヴォイア家がフランスのナポレオン式の国策会議に、法律や条約の立案を精密に検討、調査せしめる為を採用していたものを、ローマにまで持ち込んできた制度であった。上級文官と法律家・弁護士たちからなるメンバーによって構成されていた。

(91) F.Pacelli, *Diario della Conciliazione con verbali: e appendice di documenti*, Città del Vaticano, 1959, p.263.

(92) Ibid., p.35.

(93) F.Pacelli, *L'Opera di Pio XI per la Conciliazione con l'Italia*, 《Vita e Pensiero》Oct., 1929, p.622.

(94) Ibid.

(95) C.A. Biggini, *Storia inedita della Conciliazione*, Milano, 1942, p.233.

- (96) 財政協定に対しては F.Pacelli, *Diario della Conciliazione con verbali e appendice di documenti*, Città del Vaticano, 1959, p.37 参照。
- (97) Cf., F.Margiotta-Broglio, *L'Italia e la Santa Sede dalla Grande Guerra alle Conciliazione*, Bari, 1966, pp.176-177.
- (98) F.Pacelli, *Diario della Conciliazione con verbali e appendice di Documenti*, Città del Vaticano, 1959, pp.23-25. ここには Pacelli が Barone に渡したメモ (Promemoria consegnata a Barone) の原文がある。それはカトリック組織に対する暴力事件や抑圧行為の詳しいリストがある。
- (99) 一九二六年一〇月ムッソリーニ暗殺計画事件に四度見舞われたムッソリーニ派は、それを理由にこのような「法律」を成立させた。C.Seton-Watson, *Italy from Liberalism to Fascism 1870-1925*. London, 1967, p.665 に法律上、警察はどのように対応したのかについての説明がある。
- (100) Balilla ベリッラ少年団 (ファシズム体制下の少年訓練組織)。Balilla というのは一七四六年反オーストリア軍の民衆蜂起の口火を切ったといわれる一少年の愛称に因んだもの。正式な名称は Opera Nazionale Balilla で「国民事業ベリッラ」となる。
- (101) この条項は実際には、一九二七年九月段階で公表されなかった。A.Martini: *Studi sulla Questione Romana e la Conciliazione*, Roma, 1963, p.112 で、宗教的指導者階級の目標についてこの解釈と同様の意見である。
- (102) 八歳から一四歳の少年、少女は Balilla に属したが、それより小さい児童組織は Figli della Lupo (狼の子) と呼ばれた。Balilla と異なり強制的加入ではなかった。Balilla の下部組織であった。
- (103) F.Pacelli, *Diario della Conciliazione con verbali e appendice di Documenti*, Città del Vaticano, 1959, p.50.
- (104) Ibid.
- (105) D.A.Binchy, *Church and State in Fascist Italy*, Oxford. 1970², p.414.
- (106) Lyttelton, *The Seizure of Power: Fascism in Italy, 1919-29*, London, 1973, p.409.
- (107) L.Civardi, *Breve Compendio di Storia dell' Azione Cattolica Italiana*, Roma, 1956, p.205.
- (108) F.Pacelli, *Diario della Conciliazione con verbali e appendice di Documenti*, Città del Vaticano, 1959, p.25.
- (109) AAS., Vol. XXI, n. 6, 7 Iunii 1929, p.293.

political power.

On the other hand, the problem of the Church and the State, clarified by the Lateran Treaty, was the transformation of the “authority” and the “power” depending on the ancient surviving system of “*la Santità*” and “*la Mondanità*”. From a historical point of view, although humankind attempted to conceal its disgust, the religion and the State were found to be irresponsible in the “folds” of the spiritual world of the human being.

“La Galleria” between a Fortress of “Kingdom of God” and a Secular State

NODA Shigenori

Since 1870, the problem known as “*la Questione romana*” between “*la Santa Sede*” and Italy remained unsolved. The problem was the inter-authority of the Church and the State, and was rooted in the “*Risorgimento*”. Antonio Gramsci defined it as a “historical inevitability”, because both the “forfeited secular power” of the Church, which possessed a vast land of the “Papal States” in the middle of Italy, and the “annexation” of the “Papal States” and Italy brought it about. As a matter of fact, the word “*Risorgimento*” signified the end days of the Pope’s secular rule in Italy. Regardless of these historical facts, the Pope, Pius IX, not only refused to admit Italy as a unified state, but he also refused all diplomatic approaches or negotiations. He confined himself in the Vatican and became a “prisoner of Vatican”. In Italy, among the northern states of the alps, “*la Questione romana*” had already started to develop at the Religious Reformation age, and the forfeit of the Pope’s secular power had gradually come to an end. However, the divided rule of the Pope and certain foreign countries hindered Italy from solving “*la Questione romana*” until she became a unified state. On February 11, 1929, sixty years after “*la Questione romana*” had arisen, both Benito Mussolini, the Prime Minister from Italy and the Pietro Cardinal Gasparri, the Secretary of the State from “*la Santa Sede*” signed the Lateran Treaty, as delegates of both States, at the “*Palazzo Laterano*” next to the *Cattedrale San Giovanni in Laterano* in Rome.

In signing the Treaty, they glorified God with the phrase “*In Nome Trinità Santissima*” in the beginning; and the Vatican showed a particular concern about it being a language dedicated to each protocol. Since Mussolini was a well-known atheist, “*la Santa Sede*” aimed for the Treaty that it should be executed by God with His providence; not executed by man with his will or with his endeavour. The official language used in the text of the Treaty was Italian. By concluding the Treaty, “*la Santa Sede*” became an independent State as “*lo Stato della Città del Vaticano*” legally and internationally. Consequently, “*la Santa Sede*” and the Italian fascist government had come to “*la Conciliazione*” through the Lateran Treaty.

The theme taken up in this thesis is an examination of the Lateran Treaty itself. A further examination is made by clarifying aspects of the international environment, the political situation, the thought, and the religion in Italy, in those days when Italy and “*la Santa Sede*” tried to solve “*la Questione romana*”. Internationally, Italian fascists’ political power and “*la Santa Sede*” protected each other; domestically, with the Church’s action of myth, “*la Santa Sede*” supplemented and supported the fascists’